

オランダにおけるユグノーの経済活動

金 哲 雄

1 はじめに

オランダ（ネーデルランド連邦共和国、ネーデルランドの北部7州）は、ナント勅令廃止（1685年）当時に約100万人の人口を有し、約1世紀の間、著しい経済的繁栄の時期を享受していた。16世紀後半スペインからの独立後、オランダは、ヨーロッパにおける主要な海運国として急速に台頭し、商取引においてイギリス、フランスと競合していた。そして、アムステルダム（Amsterdam、ネーデルランド北部の大港市）は、西ヨーロッパにおける国際商業の中心地としてアントワープ（Antwerp、ネーデルランド南部の河港市で当時ヨーロッパの国際商業の中心地、1568～1609年のオランダ独立戦争の中心地でもあったが1585年に再びスペイン軍に支配される）に取って代わろうとした。オランダは、さらに独自の重商主義政策を展開し外国貿易と金塊の輸出入においてほとんど完全な自由を保証していた。

オランダは、ベイル（Bayle、著書『歴史事典』など）が「巨大な難民の箱舟」と呼んでいるように、7州分離独立以来、ありとあらゆる種類の避難民の避難場所となり、商工業上の利益をもたらすことを約束するすべての者を受け入れた。メアリー・チューダの統治下では3万人のプロテスタントのイギリス人、30年戦争のさなかには数多くのドイツ人、スペインの専制時代にはスペイン領ネーデルランドからワロン人、フラマン人、ブラバント人、また、スペインから追放されたユダヤ人が移住してきた。さらに16世紀および主として17世紀、大量のフランス・プロテスタントであるユグノーが移住してきたが、17世紀末におけるその数は5万5000から7万5000人にのぼると推定されている（ユグノーの世界各地における亡命地およびオランダにおける主要な亡命諸都市については図1と図2参照⁽¹⁾）。とくに、ルイ14世の迫害から逃れようとするユグノーにたいしては、このように商工業上、宗教上かなりの自由主義をとったオランダ

は、当然ながら門戸を解放し、彼らの移住を積極的に奨励したのであった。



1. Iles Britanniques. – 2. Pays-Bas actuels. – 3. Cantons helvétiques. – 4. Allemagne (voir cartes détaillées).
5. Pays scandinaves (Altona, Copenhague, Stockholm...).
6. Russie (Moscou, Saint-Petersbourg).
7. Afrique du Sud (Le Cap).
8. Guyane (Surinam, Paramaribo).
9. Amérique du Nord (Massachusetts, New York, Pennsylvanic, Maryland, Virginie, Caroline du Nord et Caroline du Sud).

図1 世界各地におけるユグノーの亡命地

* 図1と図2のユグノーの亡命地名および亡命諸都市名は、Charles Weiss, *Histoire des réfugiés protestants de France depuis la révocation de l'Édit de Nantes jusqu'à nos jours*, 2 volumes, Paris, 1853に基づいて明らかにされたものである。なお、西欧諸国の国境は現在のものを表している。

出所：Janine Garrisson, *L'Édit de Nantes et sa révocation, histoire d'une intolérance*, Editions du Seuil, 1985, pp.282-283.



1. Groningue. - 2. Leeuwarden. - 3. Balk. - 4. Sneek. - 5. Bolsward. - 6. Franeker. - 7. Harlinguen. - 8. Haarlem. - 9. Amsterdam. - 10. Leyde. - 11. La Haye. - 12. Delft. - 13. Brielle. - 14. Rotterdam. - 15. Schiedam. - 16. Dordrecht. - 17. Schoonhoven. - 18. Gouda. - 19. Utrecht. - 20. Veere. - 21. Thoelen. - 22. Goes. - 23. Middlebourg. - 24. Flessingue. - 25. Lewedorp. - 26. Breda. - 27. Maastricht. - 28. Weert. - 29. Nimègue. - 30. Arnheim. - 31. Zutphen. - 32. Deventer. - 33. Zwolle.

図2 オランダにおけるユグノーの主要な亡命諸都市

出所：Garrisson, op.cit., p.285.

オランダへの移住者たちは、オランダ経済の発展に大きく貢献した。ユダヤ人は商業・金融業を促進させたし、他の移住者も商工業において卓越した地位

を占めるにいたった。しかし、とくにユグノーのその著しい役割が確認されている。ユグノーのほとんどは、ノルマンディー、ブルターニュ、ホワトウ、ギエンヌ出身の移住者であった。彼らはいくつかの新たな製造業を移植し、衰退しつつあった製造業を再建するのに貢献し、そして、商業・金融業を大いに推進させたのである。⁽²⁾

本稿では、まずユグノー亡命者がオランダにおける資本主義的發展にどのような役割を果たしたのかを明らかにしたい。また、当時はオランダがフランス、イギリスとの重商主義競争を戦い抜こうとした時期でもあり、この点を含めた17および18世紀の社会経済的状况を考慮に入れながら、ユグノーの役割についても評価してみたい。

2 ユグノー移住の奨励

1681年5月、フリースラント（Friesland, Frise）州は、すべての亡命者がその州のオランダ居住者とまったく同じ権利を与えることを決定した。1709年7月13日には、連合州議会（Estates-General）は、次のような法令を布告した。すべてのプロテスタント亡命者は国民として受け入れ、そして帰化の権利を享受できると。この布告によれば、ほとんどの諸国の繁栄、とくにオランダの繁栄はフランス国王の激怒からの避難場所を求めた移住者によって大にもたらされたものであり、彼らは商工業の発展に大いに貢献したと言明されている。この以前でさえも、オランダ議会は、亡命軍人を援助するために15万リーヴルを、1687年6月には俸給として年に3万リーヴルを支給していた。⁽³⁾

オランダの諸都市は、多くのユグノーを招こうとして競合していた。アムステルダムは1000戸の住居を建設し、移住者に最低の賃貸料金でそれらを提供したといわれている。⁽⁴⁾そして、1681年の9月と10月には、アムステルダムにおけるすべての亡命者が自由に経済活動を行う権利、輸入税や他の市民税からの3年間の免除、生産手段を確保できるような無利子の借り入れ、彼らの生産物に対する安定した市場などを確保できることを宣言したのであった。⁽⁵⁾

1681年10月7日にアムステルダム市長は、直ちに財政援助を必要とする熟練工に対して1万ギルダーを授与することを決定し、そして1682年12月13日には、

ピエール・バリュ（Pierre Baille）という亡命者とかなり寛大な仮契約を結んだ。バリュに対して、40台の織機が備え付け可能な工場を提供し、彼自身の宿所の内部装備に300フロリン（florin）を授与し、40台のベットを貸し、労働者の維持費に無利子で1年間前貸しを行うか、あるいは無利子で3000—4000フロリンを貸すかのどちらかにし、そして要求があれば事業を拡大することに同意したのであった。バリュの方は、オランダで以前生産されていなかった、いくつかの種類の絹織物を製造し、可能な限りユグノーの亡命者のみを雇用しようとしていた。おそらく、バリュほど多くの特権や補助金を授与された移住の企業家はいなかっただろう。⁽⁶⁾総じてオランダ市長は、彼に対して約5万ギルダールの無利子貸付金を調達したという。彼は、ラングドックのクレルモン・ロデヴ（Clermont-Lodève）で以前に管理したように絹織物、毛織物、帽子を製造するために110台の織機を所有していたのである。⁽⁸⁾

ニーム出身のユグノー亡命者は1684年にサージの工場を設立し、その工場は繁栄し始めた。アムステルダムは、倉庫に貯蔵していた商品の半分の価値に相当する額を、彼らに前貸ししたのである。同年に、以前に外国から輸入されていた商品を製造するために50台の織機を備え付けるという条件で、同じような配慮がペルノ（Pereneau）という亡命者になされた。1685年、光沢のあるタフタ織の有名な製造業者であるジャン・カブリエ（Jean Cabrier）は、以前にリヨンで繁栄していたのと類似の工場を設立するため、必要な道具のすべてを授与されていたのである。そして、彼は、成功を収める過程で能力が認められると、すでに与えられていたすべての物を贈与され、さらに、オランダの労働者に技術を教えるという条件で、5000フロリンの報酬と250人用のペンション（pension）を授与された。ジャック・シャモワ（Jacques Chamoix）、ジャン・ピノ（Jean Pineau）、ジャック・ロールとディナン・ロール（Jacques et Dinant Laures）もまた、製造業を確立する際に援助を受けると、すぐにオランダ経済の発展に貢献したのであった。⁽⁹⁾

ロッテルダム（Rotterdam）、ライデン（Leyden, Leyde）、ハーレム（Haarlem, Harlem）、そしてオランダにおける他のすべての都市がアムステルダムの例に従った。すべての都市の市長は、フランスの製造業者や手工業者を来住

せしめ、彼らに数年間あらゆる税を免除するなどの特権を与えたのであった。1685年にユトレヒト（Utrecht）の市長は、定住するようになったフランスの手工業者に様々な免除を約束した。1686年にはフローニンゲン（Groningen, Gronique）とフローニンゲンのオムランド（Ommelandes）は、彼らに対してほとんどすべての公的な税を14年間、免除するという法令を出した。また、これら二つの地方は、ラシャ工場を設立しようとするすべての人々に対して貨幣や原料を提供しようとした⁽¹⁰⁾。

それゆえに、新たな競争に直面したオランダの手工業者や労働者は、新来者に与えられた免税や他の特権にただちに憤慨し始め、彼ら自身、仕事を見つめることが出来ないと不満をもらした。しかしながら、オランダは市長はいかなるユグノーもフランスへ帰還することを喜ばなかった。ハーグ（Hague, Haye）滞在のフランス大使ダヴォ（D' Avaux）は、1687年3月20日にルイ14世に次のような手紙を送っている。オランダには帰還を望んでいるフランス人が多くいるが、警察に逮捕されないようにその意志を隠そうとしていると。オランダは、彼らの帰還を防ごうとしてフランス行きのすべての船を探そうとしさえしている、とその手紙では書き続けられている⁽¹¹⁾。

3 織物工業

以上見てきたようになきわめて多くの援助を受けて、ユグノー亡命者たちは、オランダの工業を促進させた。アムステルダムは、以前は海運業都市であったが、新たな製造業者や熟練手工業者を受け入れることになった。リオンからは絹や糸の刺繍業者、花模様のついた織物やレースのデザイナー、サージやラシャ（粗製じゅうたん）の製造業者、金糸や銀糸の製糸業者、エクス・アン・プロヴァンス（Aix en Provence）からはリンネル製造業者がアムステルダムへ移住してきた。オランダの市長たちは、彼らに大きな利益を約束することによって移住を奨励したのであった。以前フランスから購入していた多くの商品は、今やオランダにおいて亡命者によって製造されるようになった⁽¹²⁾。また、ニームと同様のリボンも製造されたのであった⁽¹³⁾。

1685年前後にアムステルダムへの亡命者の多くは、絹織物、とくに黒色の光

沢のあるタフタ織（琥珀織）製造に対して助成金が与えられていた。ユグノーはトゥールやリヨンのタフタ織を模倣し、オランダの絹織物工業において巨大な成功を収めた。イギリスの税関役人たちがオランダの絹織物をフランスのものと同視したことは注目に値する。1699年のリヨンの代官の報告によると、オランダは以前リヨンからタフタ織の多くを輸入していたのが、⁽¹⁴⁾今ではオランダ自身の工業用のモデルとして役立つものしか買わなくなったという。このようにして、亡命者により確立された製造業によって、アムステルダムは、ヨーロッパを驚かすほどのスピードで繁栄し、今まで長い間トゥールやリヨン以外では製造が不可能だと考えられていたタフタの製造が、きわめて大きな成功を収めたのである。その結果、絹織物の価格も低下し、以前50スー（sou、1スー＝20分の1フラン）で売っていたのが36スーに落ち、オランダにおける絹織物の価値は28%低下してしまっ⁽¹⁵⁾たのである。

ライデン、ハーレムほどフランスの製造業が繁栄した都市はなかった。事実、両都市では数世紀間、毛織物工業が繁栄していた。ライデンでは、1671年すでに約13万9000バレンの毛織物が生産されていたが、亡命ユグノーの毛織物業者の到来とともに製造が急速に増大した。100台以上もの織機が使用されていた工場もあ⁽¹⁶⁾った。また、ユグノーの移住をもって始めて、毛織物が最高の完成度にも達したのである。その時以降ずっと、オランダにおいて最も薄いラジャ、最良の安価な商品、最も評価の高いサージが生産され、ヨーロッパにおいて名声を博すようになった。そして、高賃金に誘惑され、ルイ14世軍のカトリック兵士さ⁽¹⁷⁾え労働者としてライデンへ亡命する程であった。

ハーレムにおいてユグノーは、また絹綿ピロード（片面が毛の長いピロード状の布）、とくにカファ（caffas）という名前で商取引において知られていた、花模様のついた絹綿ピロードを移植した。それらは、ドイツ、デンマーク、スウェーデンにおいて多くの需要を見出し、それらをフランスのものよりも10%あるいは15%安く販売していた。絹綿ピロード、花模様のついた絹織物、絹と羊毛との混織の織物の名声によって、オランダは到る所で市場を確保した。このようにユグノー亡命者による生産物があまりに名声を博したので、フランスのミラン（Milan）で製造されていたピロードはオランダ・ピロードとして販

売されさえたのであった。ハーレムの絹織物は、リヨンには勝ることができなかったが、とくにパリ市場をめぐる長い間リヨンと競合していた。ユグノーよってもたらされたハーレムの絹織物は、その丈夫さによってフランスの北部全体で需要が高かったのである。⁽¹⁸⁾

ユグノー亡命者がハーレムを豊かにさせた絹織物のうち、紗（薄物、gaze）と糸のものはとくに注目すべきである。それらは当時きわめて需要が高かったもので、あらゆる社会層に普及した。これらの軽い織物は、絹あるいは金糸、銀糸から構成され、紗という名で呼ばれてとても好まれていた。それらは、ドレスだけでなく装飾のためにも使われた。これらの絹織物や通常の絹織物を製造する際には、3000台の織機が使用され、約1万5000人の労働者が雇用されていた。⁽¹⁹⁾

また、ハーレムは、フランスのリンネル工業を導入することによっても繁栄した。ルイ14世は1685年12月20日の訓令において、オランダがどうしてフランスのリンネルを買わなくなったのかの理由を見つけ出し、それを是正するように地方長官ボンルポ（Bonrepaus）に促している。ルイ14世自身もフランスのリンネルの質を高めるか、あるいはオランダで工場を設立したフランス亡命者たちを帰国させるかのどちらかをとるよう提案した。事実、多数のユグノーはピカルデーやノルマンディーのリンネル工業において得た技術や知識を多くのオランダの諸都市に普及させたのである。アイルランドのリンネル工業に大きな業績を残したルイ・クロムラン（Louis Crommelin）は、最初はオランダに亡命地を求め、そこで企業に着手して成功を収めていたのであった。⁽²⁰⁾

ハーレムでは20のリンネル工場が、ユグノー亡命者によって創設された。そして、ハーレムの居住者たちは、彼らからフランスのものと同じものを製造する方法を学んだ。その模倣が完璧になるまでは、ハーレムのリンネルはメキシコ、ペルーの港においてフランスのリンネルとして販売されていた。しかし、その質の良さと白さの点でとくに名声を博し続けたので、その後はオランダのリンネルとして購売されるようになった。これら良質なリンネル以外に、ブルターニュで生産されていた帆布の製造もユグノーによってもたらされた。そして、その多くはまもなくオランダ船員全体の消費を満たし、その他のかなりの

部分⁽²¹⁾はイギリスに輸出されたのである。

ユトレヒトにおいては、オランダにおいて依然存在し得なかった、有名なジドジェバラン（Zidjebalen）の工場が1681年に設立された。そこで生産された波紋のある絹は、質の高いものであった。そして、500人の労働者、主としてフランスの労働者が雇用されていた。彼らは、オランダ人であるジャック・ヴァン・モラン（Jacques van Mollen）がそのすばらしい工場を設立した際に助力を与えたのである。また、ピロードの重要な工場もまもなくユグノー亡命者によって創立され、その生産物はアムステルダムでは到達しなかった質と光沢を兼ね備えていた。フランス、とくにアミアンの製造業者さえユトレヒト・ピロードを模倣しようとした程であった。オランダの工業がかなり衰退していた1766年でさえ、ユトレヒトにおけるピロードや絹織物の工場では1万人の労働者が雇用されていた。ユトレヒトで古くから存在していたラシャ、主として黒色のラシャの工場も、ユグノーによって完成されたのであった。⁽²²⁾それらの工場のほとんどが彼らの手中にあり、長い間にわたって繁栄し続けていた。

3 他の産業諸部門

前述の織物工業においては、多数の熟練手工業者のみならずデザイナー、金・銀細工師が必要とされた。と同時に、他の部門においてもユグノーの資本、労働力、能力のオランダへの流入は不可欠であった。

織物工業とその類似の生産物に加えて、ノルマンディー出身のユグノー移住者たちは、とくにロッテルダムにビーバなどの毛皮から帽子を製造する技術を移植した。事実、ロッテルダムは、彼らによる帽子製造業が繁栄したのであった。ピエール・ヴァラン（Pierre Varin）、ルイ・ティオレ（Louis Thiolet）、ダヴィド・マレ（David Mallet）のようなルーアン出身の帽子製造業者は、迫害を受ける以前に毎年、数千のコドゥベック（caudebecs）帽子をオランダに供給していたが、ロッテルダムに定着後まもなくかなりの量を輸出し始めるようになった。そして、ジャック・デュ・ロン（Jacques Du Long）、ピエール・ブルドン（Pierre Bourdon）やその他の製造業者たちは帽子の輸出税の削除と輸入税の増加を懇請し、オランダ政府はこの要求を認め、帽子製造業を奨

励したのであった。1リーヴルにつき4スーの輸出税は廃止され、輸入税は1リーヴルにつき6スーから10スーと40%増加することとなった。その結果、フランスの帽子製造業者は、「7州」に生産物を販売しても利益を見だし得なくなった。さらに、この帽子製造業を奨励するために、ユグノー亡命者は、8人以上の労働者を雇用してはいけないという古い規制から解放されて、希望するだけの数を雇用することが認められたのである。⁽²³⁾このようにしてフランスは、リンネル工業と同じぐらいの損失を帽子製造業においても蒙ったという。ハーグ滞在のプロシヤ大使は、オランダにおけるビーバの価格が新たな帽子製造工場の創業以来40%も低下したと言明している。⁽²⁴⁾すなわち、その価格が10エキュ(écu)から6エキュに落ちてしまったのである。⁽²⁵⁾

また、ユグノー亡命者の知的労働によって、機械技術や最も地味な技巧までが大いに改良された。金、銀、宝石、とくにダイヤモンドを切り、磨く技術は、彼らがフランスから持ってきた生得の好みによってかなりの前進を見た。彼らは、砂糖、塩、硫黄、樹脂の精製、ワックスの漂白、石鹼、とくに黒色の石鹼の製造、緋色の染色、モロッコ革やセーム皮のデザインに関しても、オランダ人が以前に使用していた方法よりも優れたものを移植した。時計の製造や修理、兵器製造者や錠前師の技術の著しい進歩も、彼ら亡命者に負っているのである。ベルリンにおいてと同様にアムステルダムにおいても、フランスの錠はまもなく最良で最も安全性をもったものと評価された。フランスの靴修理屋、仕立て屋、理髪師、レース製造業者までが優れた職人としてほとんどみなされた。このようにして、彼らの完璧な仕事によって、ユグノーの製造業者と手工業者は、フランス、とくにパリが以前得ていたと同じ程度の評価を受けるようになったのである。⁽²⁶⁾貴族たちが高貴な家具、銀や錫の食器、時計、楽器、金・銀製品、宝石、絵画を購入するだけでなく、富裕な市民たちも強力な需要者になった。⁽²⁷⁾

製紙業やそれと密接な関連をもった印刷業、出版業においても、オランダはユグノー亡命者によって大きな利益を受けた。オランダの印刷業者は、ナント勅令廃止以前は紙の白さや強さからしてフランスのアムベール(Ambert)、アングレーム(Angoulême)のものを好んだ。アングーモワ(Angoumois)において500人もの労働者を雇用して、最も優れた工場の一つを管理していた

2人のヴァンサン（Vincent）兄弟は、オランダに移住し、製紙業で完全な成功を収めた。オランダで製造された紙は、ヨーロッパのほとんどの地域で需要を見い出すようになった。⁽²⁸⁾

このような状況に対してフランス大使は、オランダの印刷業者がユグノー亡命者によって製造された紙を使用してフランスのものを排除しないかと心配する程であった。ユグノーはオランダにおいて多くの製紙工場を設立し、トランプ、上質の本、銅版画や印刷物の再生産に適切な質の高い紙を実にうまく（only too well）模倣していたのである。オーヴェルニュ（Auvergne）における製紙業に関する研究者コアンディー（Michel Cohendy, *Note sur la papeterie d'Auvergne anterieurement a 1790*, Clermont, 1862）によれば、オランダは最良の紙においてフランスより優れており、「1世紀以上」（for more than a century）も製紙業において事実上の独占を享受していたという。⁽²⁹⁾

事実、アムステルダムの印刷業者は、オランダで発行される書籍用にフランスの紙をもはや使用しなくなっただけではなく、フランス、イギリス、ドイツの著者のために多数の書籍を印刷していた。オランダの紙はきわめて安価で良質なので、著者や印刷業者はそれらを大いに好んだのである。多くの労働者もまた、アムステルダムの印刷業において雇用され、オランダ経済の発展に貢献したのである。ザーン（Zaan）川流域に設立された工場は、フランスの最高のもものと競合し、長い間オランダ工業の最も重要なものの一つとなっていた。18世紀のほとんど全般を通じて、ユグノーの印刷業は、選帝侯の庇護の下で他の亡命者によって設立されたドイツのものと同ライバルとなっていた。ドイツの労働は安価であるけれども、紙はアムステルダムよりもライプツィヒのほうが高価なので、アムステルダムの富裕な商人たちは、比較的小さな利益に満足し、長い間にわたって信用を得ることができたのであった。⁽³⁰⁾

「連邦共和国」の誕生以来、とくにライデンやアムステルダムでは印刷業、出版業が繁栄したが、17世紀の後半には急速なスピードで衰退し始めた。しかし、ユグノー亡命者によって再び活気を取り戻した。彼らによって、オランダの出版業は強力な刺激を受け、18世紀においてその影響力はヨーロッパ全体に及んだ。それは、フランスでは禁止されていたプロテスタントの書籍を多数発

行することから始まった。母国で沈黙が強いられていたフランスの著者たちは、自らの考えを普及させたのである。彼らが発行した書籍、定期刊行物、新聞はいたるところで熱心に読まれ、フランスにさえ販売されるようになったのであ⁽³¹⁾る。

多くの重要な出版社がユグノー亡命者やその末裔によって創立された。シャルモ (Chalmot)、ネオルム (Néaulme)、デスボルドゥ (Desbordes)、シャンギオン (Changuion)、リュザック (Luzac) 兄弟、レー (Rey)、マルシャン (Marchand) は、ハーグ、ライデン、アムステルダム の書籍業において長い間にわたってリーダ格であった。ヨーロッパにおける出版社の最初の例として、リヨン出身のユグタン (Huguetan) 家のものを挙げるができる。この一家の家長は、3人の息子と共にアムステルダムに定着し、以前に存在していたものの中で最も広範囲にわたる書籍販売網を創造した。この巨大な取引における最大の発展は、モンツェラー (Montferrat) の末っ子、ピエール (Pierre) ・ユグタンの勤勉と賢明さによってもたらされた。この一家によって販売された書籍のほとんどは、印刷業者として、デザイナーや彫版師としても有名なベルナル・ピカル (Bernard Picart) の印刷所で作られた。ベルナルは、1672年にパリで生まれ、熱烈なプロテスタントの信者である父、エティアン (Étienne) ・ピカルと共にナント勅令廃止以降にフランスを去った。彼は、最初のうちは新たな書籍に版画を入れるために雇用されていたが、彼の非常に美しいデザインにより、オランダの書籍業において名声を博すようになったのである。⁽³²⁾

このようなオランダの印刷業や出版業に及ぼしたユグノーの影響により、オランダはフランス、イギリス、ドイツにおいて新たに開拓された販路の知識層との交流を深めるようになった。またオランダ国内でも、知識を普及させ、教育水準を高めることとなった。オランダの物質的繁栄も、このような印刷業、出版業によってもたらされたのである。多くの学者のみならず校正者、活字鋳造者、製本屋、デザイナー、彫版師そして革、羊皮紙の製造業者は、ユグノー亡命者から恩恵を受けたのであった。⁽³³⁾

ユグノーがオランダに及ぼした影響は、手工業や製造業においてだけではなかつ

た。海運業と捕鯨業も、その影響について言及するのに値するのである。多くのユグノーの船員や漁師が1681年以降、オランダに亡命地を求めたという。この移住によってオランダはどの程度の利益をあげたかを確定するのは困難であるが、しかし、毎年グリーンランド沿岸への捕鯨船数を見ると、1681-85年には1676-80年に比べて平均して約50%高くなっており、1690年まではその数は著しくは低下しなかったことが判る⁽³⁴⁾。捕鯨会社の取締役やメンバーを見ても、ユグノーが大きな役割を果たしたことが理解できる。とくに、ドルドレヒト（Dordrecht）において本格的な飛躍をもたらされ、「グリーンランド漁業の取締役」（directeurs de la peche groenlandaise）のポストは、たびたびユグノーによって占められていたのである。⁽³⁵⁾

農業においても、ユグノーの影響は注目されるべきである。イチゴ、温暖な気候に適したチョウセンアザミさえも、栽培が増大された。花き（卉）栽培も最も印象深く展開した。バラ、カーネーションはフランスから導入され、そしてチューリップ（ヴェネツィアの商人によって持ち込まれた）の栽培も、この流行の花に対するヨーロッパの需要を満たしたのであった。⁽³⁶⁾

4 商業・金融

絹織物工業、リンネル工業、毛織物工業、帽子製造業、製紙業、書籍印刷業などは、ユグノーの亡命者がオランダに繁栄をもたらした主要な工業部門であった。それゆえ、フランスはそれらの損失、衰退を嘆かざるを得なかったのである。マックファーソン（*Macpherson's Annals of commerce*, t. II, p.610. Edition de Londres, 1805）によれば、フランスの全収入は、1683年から1733年の50年間で7500万ポンド以上減少したという。ルイ14世治世下の後半期における不幸な戦争は、その衰退の最も積極的な要因であったことには疑いはないが、ユグノーが一亡命先において移植した工業もまたその致命的な衰退の要因になったのである。彼によれば、絹織物、ピロード、毛織物、リンネルのフランスからオランダへの年間の輸出量は、60万ポンドの減少であった。帽子は21万7000ポンド、ガラス、時計、家具は16万ポンド、レース、手袋、紙は26万ポンド、帆布、リンネル布、粗織布は16万5000ポンド、石鹼、サフラン粉（香料・染料）、

パステル（青色染料）、蜂蜜、羊毛（紡績段階）は30万ポンドの減少を見たという。フランスからオランダへの輸出の減少量は、合計で170万2000ポンドにもなった。また、マックファーソンによれば、フランスからイギリスへの輸出の減少量も188万ポンドにもなったという。このように、オランダ、イギリス2国へのユグノー亡命者がフランスにもたらした年間の損失は、358万2000ポンドを下らなかったのである。⁽³⁷⁾

事実、ユグノー亡命者がオランダの製造業に及ぼした影響に伴って、必然的にオランダの商業は繁栄したのであった。フランスにおけるプロテスタントに対する迫害により、オランダとフランスとの商取引は、強力な衝撃を受けることとなった。多数のフランスの商人たちは、海港の諸都市を去ってパリやその隣接地域に移住し、その弾圧に対する避難場所を見出すようになった。ユグノーのなかには竜騎兵によって家が略奪され、商品が破壊されるかあるいは没収された者もいた。そして、オランダの商人たちもこの災難に巻き込まれたのであった。ナント勅令廃止に関するニュースが伝えられた時、「アムステルダム証券取引所」(bourse d'Amsterdam) にたいして衝撃があまりにも大きかったので、単にフランスの商人と取引しているという理由だけで、最も支払能力のある一家にさえも資本の供給が拒否された。⁽³⁸⁾

ルイ14世の勅令による最初の影響の一つは、オランダへの多くのユグノー亡命者の資本、信用、商業精神やその知識をオランダに保証することに現れた。オランダは、とくに彼らが彼らの親類や友人、そしてドイツ、イギリス、アメリカへと次第に広がっていった同宗派の人々とうまく築き上げた密接な関係によって、利益を受けた。彼らは、その宗教的性格から生じる道徳上の厳格さ、勤勉な習慣、秩序を重んじる精神によって、大きな財産を次第に築き上げ、オランダ共和国 (État) の繁栄に貢献したのであった。本来貧しい漁師の出であったオランダ人自身も、巨大な富を得たのであった。ユグノーの亡命家族によって設立された工場は、大量の遊休資本に対して有利な投資を提供した。これらの工場の生産物が輸出されることによって、外国貿易は増加するようになった。このようにして、ユグノー亡命者は、移住先のオランダの商業に影響を及ぼすとともに、フランス政府からの迫害にたいして何倍もの償いをしたのであ

(39)
た。

フランスのラ・ロッシュェル、デイエップ、ルーアン、リヨンなどの出身の最も富裕なユグノーがオランダへ逃亡したといわれる。彼らがかなりの量の貨幣資産を持参してアムステルダムに貸付資金を多く供給したので、利子率が低下することとなったという。アムステルダム銀行の預金および正貨予備金が1685年以降著しく増加し、1676-80年から1696-1700年まで預金量は約2.3倍、正貨予備金は約2.5倍に上昇した。この増加にナント勅令廃止が少なくとも関係していたと考えられているのである。⁽⁴⁰⁾

ハーグのフランス大使ダヴォは、1685年にすでにフランスから2000万リーヴル以上の貨幣がオランダへ流入したと見積もっていた。60万リーヴルを持参したパリのワイン販売業者もおれば、100万リーヴルを持参した書籍業者もいた。⁽⁴¹⁾このような貨幣の流入によって、貸付資本の値下げがもたらされた。6ヶ月で金貨に対しては2分の1%、銀貨に対しては4分の1%の利子となった。手形割引は2%の低利率まで低下し、その数年後にはその半分までも低下してしまったのである。これによって金融業が活気づいただけでなく、工場や商店の設立、展開においても他人資本が活用されることによって、経済活動が促進されたのであった。⁽⁴²⁾

前述のリヨン出身のユグタン家は、アムステルダムにおいて出版業と共に大規模な銀行業を営んだ。とくにジャン＝アンリ（Jean-Henri）・ユグタンは、フランドルにおけるグランド＝ブルターニュ（Grande-Bretagne）の軍隊にきわめて多くの額を送金することによって、17世紀後半における最大の銀行家・金融業者の地位を築いたのである。⁽⁴³⁾スペイン継承戦争（1701～13年）中の1703年1月には、パリ居住の糧食係ジャック・ビュイソン（Jacques Buisson）に7%の利子でルイ金貨4万を貸し付けていた。⁽⁴⁴⁾ユグタン家を始めとする多くのユグノー銀行家、富裕者たちがオランダ、イギリス、アメリカ、ドイツなどへフランスの貨幣財産を持ち出した結果、その総額は約10億リーヴルともいわれている。⁽⁴⁵⁾

オランダ在住のユグノーは国際規模において、とくにイギリス在住のユグノーと相互に関係を保ちあった。例えば、アムステルダムにはジレット・オベール

(Gillette Aubert)、アンリ・ブロッケ (Henry Broquet) などのユグノーの家族が群居しており、彼らはロンドン在住のユグノー仲買人を通じて各種の投資に係わり⁽⁴⁶⁾あっていた。ハーグ在住のジェムズ・デロル (James Dayrolles) は仲買業を営み、その晩年には4000ポンドのイングランド銀行株式を保有した。彼は1739年に亡くなるまでそこに留まり、一家は1746年から1753年の間イギリスへ移住した。そして、彼らは18世紀の末までイングランド銀行株式を保有していたのである。⁽⁴⁷⁾バザン (Bazin) 家もハーグに居住し、イギリス投資に係わ⁽⁴⁸⁾っていた。

ロッテルダムにおいても時計屋であるアブラム・フロマンテール (Abraham Fromanteel)⁽⁴⁹⁾は、イギリス投資に係わりあった。オジエ (Augier) 家もロッテルダムに居住し、イングランド銀行株式投資に関与していた。もともとこの一家は、フランスに多大な資産を保有する、経験豊かな投資家であった。オジエ家の貨幣資産は、銀行株式のほか Million Bank 年金公債 (そのうちの4公債はアムステルダム在住のオジエ家に支払われていた)、1707年発行の年金公債、1693年発行のトンチン式年金公債、少くとも二種類の政府短期債に投資されたので⁽⁵⁰⁾あった。

5 結 び

以上、展開したオランダにおけるユグノーの経済活動には、いくつかの重要な社会経済史的意義があるように思われる。

まず、ユグノー亡命者はオランダにおける資本主義的發展に大きな役割を果たしたいえる。この点では、イギリス、ドイツ、アメリカなどにおいて果たしたユグノーの役割と基本的には同じである。ユグノーが、とくに織物業、製紙業などの製造業を新たに移植するか改良することによって、オランダにおけるほとんどの諸都市は多くの利益を受けたのであった。とくにアムステルダムにおいてその影響が著しく、彼らの経済的役割によってアムステルダムは世界において最も著名な都市の一つとなったのである。

しかしながら、オランダ経済は主として工業的よりはむしろ商業的であった。平和の回復と共に、とくにユトレヒト条約 (1713年) 以降、ユグノーの移住者

によって移植された新たな工場や工業部門の多くは、フランスからの競争に直面した際に、その拡張に失敗するかそれを中止するかであった。一般的に、18世紀におけるオランダ経済の発展は17世紀のテンポを維持できなかったし、他のヨーロッパ諸国（イギリス、フランス、ドイツ）に対して相対的に経済的基盤を失ったことが認められている。また、1715年のユグノーの市民権取得（帰化）は、彼らの経済的貢献の承認であると同時に、従来の特権の止揚でもあったことを忘れてはならないだろう。⁽⁵¹⁾

それにもかかわらず、オランダは依然として商業・金融の国際的中心地でありつづけ、この領域でユグノーは、ユダヤ人とともに、最も大きく、長期間にわたって影響力を行使したのであった。⁽⁵²⁾ イギリス、フランスとの重商主義競争の下で18世紀のオランダ経済が一定のレベルを保ち得たのは、商業・金融の両部門によって支えられたからである。このことを考え併せると、ユグノーの経済的役割は大いに評価されるべきである。商業・金融の分野におけるユグノーの貢献が、オランダにおけるユグノーの経済的役割の著しい特徴となっているのである。

最近の社会経済史の研究によると、ヨーロッパ経済史を全ヨーロッパ的枠組みで考察すべきだということを、重要な研究課題として提起している。⁽⁵³⁾ この点からして、宗教的迫害された移住者が移住先のいたるところで資本主義の形成にきわめて大きな役割を果たしたことを「くわしく証明するのは、16、17および18世紀の経済史を記述することを意味する」というゾンバルトの指摘は、今日においてもきわめて重要な意味をもっている。⁽⁵⁴⁾ 当時、プロテスタント諸国の商人たちが取引先として好んだのが同宗派のユグノーであったし、ユグノー自身も同宗派の親類や友人と密接な経済的関係を築いていた。以上詳しく展開してきたオランダの資本主義的発展におけるユグノーの役割も、ヨーロッパ経済の発展におけるユグノー・ネットワークの経済的役割の一環として、この証明の著しい事例の一つと見るができる。

最後に、宗教と経済との関連、とくに近代資本主義成立に対する宗教的要因との関連でユグノーの役割について評価を試みたい。ゾンバルトは、「資本主義精神」成立の源泉の一つとして、移住という自己実現の可能性が経済活動の

面だけ許されているという「社会的状況」を重視し、ユグノーであれ、ユダヤ教徒であれ、カトリックであれ、外国に移住した異端者たちが移住先で資本主義の発展に大きな役割を果たしたと考えている。しかし、この点だけでは移住者一般の経済的役割を説明し得ても、とくにユグノーの近代資本主義の発展において果たした役割を説明するには不十分である。ヴェーバーが指摘する禁欲的プロテスタンティズムの意義もその説明の根拠に加える必要があるだろう。ヴェーバーは、「近代資本主義の精神」がプロテスタンティズムの合理的経済精神に起源をもつもの⁽⁵⁵⁾のだとして、ユダヤ教徒やカトリックとは違って、ユグノーを近代資本主義の担い手として評価するのである。オランダを商業・金融の中心地に作る際に果たしたユグノーの役割も、この観点から評価されるべきなのである。

（注）

- (1) Werner Sombart, *Der Bourgeois, Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen*, 1923, S. 387. 金森誠也訳『ブルジョワ近代経済人の精神史』中央公論社、1990年、398頁。Charles Weiss, *Histoire des Réfugiés Protestants depuis la révocation de l'Édit de Nantes jusqu'à nos jours*, II, Paris, Charpentier, 1853, p.25. なお、イギリス、ドイツ、アメリカなどにおけるユグノーの経済活動については、拙稿「ユグノーの経済史的研究への一つの序論」大阪府立大学『経済研究』1983年第28巻第4号、「ユグノー亡命の金融・財政的帰結」大阪府立大学『歴史研究』1984年第23号、「アメリカにおけるユグノーの経済活動」大阪府立大学『経済研究』1990年第35巻第2号参照。
- (2) Weiss, op.cit.,II, p.130.
- (3) Warren C. Scoville, *The Persecution of Huguenots and French Economic Development 1680-1720*, Berkeley, Los Angeles, 1960, p.341.
- (4) Solomiac, "Le Refuge dans le pays de Vaud (1685-1680)", *Bulletin de la société de l'histoire du protestantisme français*, IX, Paris, 1860, p.360.
- (5) Weiss, op.cit.,II, pp.6-7.
- (6) Scoville, op.cit., p.342.
- (7) Ingrid und Klaus Brandenburg, *Hugenotten, Geschichte eines Martyriums*, Edition Leipzig, 1990, S.131.
- (8) Weiss, op.cit.,II, p.132.
- (9) Ibid.,pp.132-133.

- (10) Ibid.,pp.133-134.
- (11) Scoville, op.cit., pp.342-343.
- (12) Weiss, op.cit.,II,pp.134-135.
- (13) Léon Dutil, "L'industrie de la soie a Nîmes jusqu'en 1789", *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, X, 1908, p.321.
- (14) Scoville, op.cit., pp.343-344.
- (15) Weiss, op.cit., II,p.136.
- (16) Brandenburg, a.a.O.,S.131.
- (17) Weiss, op.cit.,II, p.138.
- (18) Ibid.,pp.138-139.
- (19) Ibid.,p.140.
- (20) Scoville, op.cit.,pp.344-345.
- (21) Weiss, op.cit.,II,pp.140-141.
- (22) Ibid.,pp.141-142.
- (23) Ibid.,p.137.
- (24) Scoville, op.cit.,p.346.
- (25) Weiss, op.cit.,II,p.136.
- (26) Ibid.,pp.143-144.
- (27) Brandenburg, a.a.O.,S.132.
- (28) Weiss, op.cit.,II,pp.144-145.
- (29) Scoville, op.cit.,p.346.
- (30) Weiss, op.cit.,II,p.146.
- (31) Ibid.,pp.146-147. ユグノー亡命者のなかに、哲学者ピエール・ベール (Pierre Bayle、著書『歴史批評辞典』など) がいた。彼は、1684-87年にロッテルダムにおいて『文芸共和国便り』 (*Nouvelles de la République des Lettres*) を刊行していた (クシシトフ・ボミアン著、松村剛訳『ヨーロッパとは何か一分裂と統合の1500年』平凡社、1993年、119～20頁)。
- (32) Ibid.,pp.149-150.
- (33) Ibid.,p.150.
- (34) Scoville, op.cit.,pp.346-347. ヴァイス (Weiss) によれば、その船数が1679年には126隻に過ぎなかったのが、1680年には148隻、1681年には172隻、1682年には186隻、1683年には242隻、1684年には246隻に、そして、ナント勅令廃止以降に多数のユグノー船員が到着することによって、著しく増加したという (Weiss, op.cit.,II,p.143)。
- (35) Weiss, op.cit.,II,p.143.
- (36) Brandenburg, a.a.O.,S.132.
- (37) Weiss, op.cit.,II,pp.150-151.

- (38) *Idid.*, pp.151-152.
- (39) *Idid.*, pp.152-153.
- (40) 拙稿「ユグノー亡命の金融・財政的帰結」大阪府立大学『歴史研究』1984年第23号、72～4頁参照。フランスにおいてプロテスタンティズムは、あらゆる社会層に浸透したが、とくにブルジョアジーにおいて顕著であった。そのうちの最も富裕なユグノーがオランダへ亡命したのである。なお、ユグノーと社会層との関係について詳しくは、S. ムール著、佐野泰雄訳『危機のユグノー—17世紀フランスのプロテスタント』教文館、1990年、141～79頁、拙稿「ユグノーとフランス初期資本主義」大阪府立大学『歴史研究』1986年第24号、68～70頁参照。
- (41) Ernest Jean Arnal, “De l’influence des réfugiés français aux Pays-Bas”, *Bulletin de la Fondation Huguenote des Pays-Bas*, Amsterdam, 1986, p.231.
- (42) Brandenburg, a.a.O., S.131.
- (43) André-E. Sayons, “Le Financier Jean-Henri Huguetan à Amsterdam et à Genève”, *Société d’histoire et d’archéologie de Genève*, VI, 1937, p.259.
- (44) H.Lüthy, *La Banque Protestante en France de la Révocation de l’Edit de Nantes à la Révolution*, I, 1959, p.141.
- (45) *Bulletin de la société de l’histoire du protestantisme français*, XXIX, 1880, p.190. Scoville, op.cit., p.291.
- (46) 仙田左千夫『18世紀イギリスの公債発行』啓文社、1992年、43～4頁。
- (47) A.C. Cater, “The Huguenot Contribution to the Early Years of the Funded Debt, 1694-1714”, *Proceedings of Huguenot Society of London*, Vol. XIX, No.3, 1955, p.32.
- (48) *Ibid.*, p.38.
- (49) *Ibid.*, p.37.
- (50) *Ibid.*, pp.37-38. Million Bank とは、1693および1694年の Million Act に基づいて設立された、富くじ券と年金の売買を結びつけた奇妙な混合物であった（新庄 博『イングランド銀行成立期における銀行計画と信用通貨』清明会叢書 VII、1969年、32～3頁参照）。
- (51) 二人のオランダの歴史家、ベルク（W.E.J. Berg, *De Réfugiés in de Nederlanden, na de Herroeping van het Nantes*, Amsterdam, 1845）とニエロップ（Leonie van Nierop, “Stukken Betreffende de Nijverheid der Réfugiés te Amsterdam”, *Economische-Historisch Jaarboek*, VII, 1921）は、オランダの工業に及ぼしたユグノーの長期的影響をあまり大きなものとは見ていないのである（Scoville, op.cit., p.347）。また、ブランデンブルク（Brandenburg）によれば、オランダ経済におけるユグノーの影響は考えられていたよりは大きいものでなかったという。当時の経済的不振によって、ユグノー製造業者たちの競

オランダにおけるユグノーの経済活動（金）

争は激しくなり、オランダの嘆きはますます強くなっていった。ユグノーの帰化によって、以前に特権を得ていたユグノー移住者たちは、今やオランダ人と同等に扱われるようになったのである（Brandenburg, a.a.O., S.132）。

- (52) この点に関しては、ユダヤの商人や金融業者がヨーロッパ経済の発展に貢献したことを忘れてはならない。これに初めて正面から光を当てたのがゾンバルトであった。彼は『ユダヤ人と資本主義』（Werner Sombart, *Die Juden und das Wirtschaftsleben*, Duncker & Humblot, 1911.）のなかでユダヤ人の宗教と経済生活について詳細に述べている。ただ、ユダヤ人のこうした経済的役割は、近代資本主義成立との関連では問題とならう。
- (53) 石坂昭雄「ヨーロッパ経済」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣、1992年、35～6頁参照。
- (54) Werner Sombart, *Der Bourgeois, Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen*, S.385. 金森誠也訳『ブルジョワ近代経済人の精神史』、396頁。
- (55) 拙稿「ウェルナー・ゾンバルトのユグノー論」大阪経済法科大学『経済研究年報』第11号、1992年、46～7頁参照。

